

例 言

1. 本書は、北海道斜里郡斜里町ウトロ西地先国有林（網走南部森林管理署 1377 林班は小班）に所在するチャシコツ岬上遺跡（登録番号：I-08-21）の発掘調査概要報告書である。

2. 調査は、平成 26 年度文化財補助事業（国宝重要文化財等保存整備費補助金）に係る町内遺跡学術発掘調査（保存目的のための内容確認調査）である。

3. 調査期間、面積ならびに調査体制は以下の通りである。

発掘調査期間

平成 26 年 9 月 2 日～

平成 26 年 9 月 30 日(現場作業)

平成 26 年 11 月 18 日～

平成 27 年 3 月 31 日(整理作業)

調査面積 40㎡

調査体制

調査主体者	斜里町教育委員会
	教育長 村田 良介
事務局	斜里町立知床博物館
	館長 山中 正実
担当者	〃
	学芸主幹 松田 功
調査員	〃
	学芸係 平河内 毅
	臨時職員 工藤 大

発掘作業員

平田陽子、井上博之、牧野睦美、元木哲之、湯浅秀明。

整理作業員

斉藤 葵、佐藤トモ子、西塚玲子、牧野睦美、元木哲之。

4. 本書の執筆は調査員各自が分担した。文末に執筆者名を明記している。現場作業における図面作成並びに、整理作業における第 2 図版作成は、調査員各自が作業にあたった。出土遺物の第一次整理及び実測、拓本並びにトレースは整理作業員の各々が担当した。現場での写真撮影は、調査員が中心となり作業にあたり、概要報告書用の遺物写真撮影は整理作業員の元木、牧野があたった。図版 1~3・6 は平河内、写真図版及

び図版 4・5 は工藤が作成した。なお、編集及びレイアウトは Adobe InDesign CS6 を使用して平河内が担当した。

5. 当遺跡周辺の地質構造及び地形についての論考並びに、出土石器の石質肉眼鑑定は、当館学芸員の合地信生氏にご教授頂いた。

6. 遺跡位置図には、国土地理院発行の 1 / 25,000 地形図、ウトロ（NL-55-36-4-2）の一部を使用した。

7. 出土遺物の保管・管理は、斜里町教育委員会（斜里町埋蔵文化財センター）で行う。

8. 発掘調査及び本書作成にあたり、以下の方々、機関のご協力、ご指導、ご助言を賜りました。ここに氏名を記し、感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

近江俊秀・長谷部善一（文化庁文化財部記念物課）、長沼 孝・西脇対名夫・藤原秀樹（北海道教育庁生涯学習部文化財・博物館課）、北海道森林管理局網走南部森林管理署、熊木俊朗・国木田 大（東京大学）、加藤博文・葦島栄紀（北海道大学）、種石 悠（北海道立北方民族博物館）、村田一貴（中標津町教育委員会）、天方博章（羅臼町郷土資料館）、石渡一人（別海町教育委員会）、小野哲也（標津町ポー川歴史民俗資料館）、金盛典夫。

目次

例 言	I ~ II	図 版	2 ~ 7
第 1 章 遺跡の目次	1 ~ 4	写真図版	PL.1 ~ 10
第 2 章 調査区の概要	5 ~ 8		

図版目次

第 1 図 チャシコツ岬上遺跡位置図	2	第 4 図 PIT 1(土坑墓) 及び PIT 2a(土坑)	6
第 2 図 地形測量図	3	第 5 図 PIT 1(土坑墓) 及び PIT 2b(土坑墓)	6
第 3 図 調査区及びグリッド配置図	4	第 6 図 トレンチ 5 層位図	7

写真図版目次

PL.1		トレンチ 4 石鏝出土状況 W →
遺跡遠景 SW →		トレンチ 4 調査風景②
遺跡遠景 NE →		PL.7
PL.2		トレンチ 5 土器出土状況 SE →
チャシコツ岬上遺跡 出土土器		トレンチ 5 土器一括出土状況① E →
トレンチ 4 調査前状況		トレンチ 5 土器一括出土状況② E →
トレンチ 5 調査前状況		トレンチ 5 土器一括出土状況③ S →
トレンチ 4 骨斧出土状況 SW →		トレンチ 5 土器一括出土状況④ N →
トレンチ 5 刀子出土状況 E →		PL.8
PL.3		トレンチ 5 焼土・木炭 a 調査状況 S →
トレンチ 4 PIT 1 集石検出状況 E →		トレンチ 5 焼土・木炭 a 土層断面 E →
トレンチ 4 PIT 1 掘削状況 W →		PL.9
トレンチ 4 PIT 1 副葬品出土状況 NW →		トレンチ 5 調査状況 SE →
トレンチ 4 PIT 1 掘削状況 SW →		トレンチ 5 土器出土状況 NE →
トレンチ 4 PIT 1 調査風景		トレンチ 5 土器・炭化材出土状況 W →
PL.4		トレンチ 5 焼骨出土状況 NW →
トレンチ 4 PIT 1 完掘状況 SW →		トレンチ 5 石鏝出土状況 S →
トレンチ 4 PIT 1 被り瓷検出状況 NW →		PL.10
トレンチ 4 PIT 1 歯出土状況 W →		トレンチ 5 土器出土状況① S →
トレンチ 4 PIT 1 調査風景		トレンチ 5 土器出土状況② E →
PL.5		トレンチ 5 土器出土状況③ SE →
トレンチ 4 PIT 2a 検出状況 SW →		トレンチ 5 作業風景
トレンチ 4 PIT 2a 完掘 NW →		発掘風景 集合写真
トレンチ 4 PIT 2b 焼土検出状況 E →		
トレンチ 4 PIT 2b 完掘状況 SW →		
トレンチ 4 PIT 2a 土器出土状況 NE →		
PL.6		
トレンチ 4 完掘状況 S →		
トレンチ 4 海獣骨出土状況 S →		
トレンチ 4 調査風景①		

第1章 遺跡の概要

発掘調査の経緯

ウトロ市街地周辺及び、ウトロから斜里市街地に向かう海岸沿いには、海に突き出た岬状の特異な地形が見られる。ウトロ市街にはオロンコ岩や三角岩を含むウトロ崎があり、ウトロ市街から斜里市街地に向け順にチャシコツ崎、弁財崎、オシンコシン崎がある。これら海に突き出た崎のうち、オロンコ岩とチャシコツ崎、弁財崎にはアイヌ文化期のチャシ址があり、チャシコツ崎にはオホーツク文化期を主とした集落跡が残されている。

道内各地、中でも道北及び道東地域を中心としてオホーツク文化期の集落跡は数多くあるが、標高 50m を超える海に突き出た断崖状地形（海岸段丘）に、31 棟ものオホーツク文化期のほぼ単一集落跡が見られるのは当遺跡以外にはない。

なぜこのような生活するには不向きな特異地形上に、31 棟もの竪穴を有する集落を形成しなければならなかったのを調査するべく、2013 年度より国庫補助金を活用した学術調査を実施することとなった。

今年度は、昨年と同様に集落内の平坦土地にトレンチを 1 列（トレンチ 4）掘削し、さらに、岬の縁辺部において自然崩壊の危険に晒されている竪穴住居跡 1 棟（トレンチ 5）について発掘調査を実施した。

立地

チャシコツ岬上遺跡（I-08-21）は、北緯 44° 04′ 00″、東経 144° 58′ 40″、ウトロ市街地の南西方向、海に突き出たチャシコツ崎頂部の平坦地上に位置し、おおよそ 5,600m²の面積を有する（図 1）。

地表面から確認できる限りでは、この平坦地上には 31 棟もの竪穴住居跡が隣接して構築されている。また、過年度の調査結果から、この遺跡はオホーツク文化期末のほぼ単一集落であることが明らかとなっている。

チャシコツ岬上遺跡の近辺には地すべり地形が各所に見られ、国道 334 号線のウトロトンネル工事の際には大量の断層粘土が見つかった。そのため、遺跡の立地する岬自体も地すべりにより形成された可能性が高く、岬縁辺部に見られる崩落の原因は地すべり地形がブロック単位で崩落したことを示唆している。

チャシコツ岬周辺のオシンコシン崎やウトロ崎など

は粗粒玄武岩を主とし、波や流水による浸食作用を受けにくい硬い岩石により形成されている。一方、チャシコツ崎は安山岩質集塊岩を主とし、泥質頁岩・砂岩を挟在した比較的浸食作用を受けやすい地質構造をしている。このような地質で、波や流水の浸食作用を受けながらも岬状の形状を形成・維持するのは難しいと考えられる。

おそらく元々は、下末吉海進後に形成された中位段丘面であったが、地すべりによって山麓より現在のチャシコツ崎を形成したものと考えられる。

当遺跡周辺にはチャシコツ岬下 A・B 遺跡、ウトロチャシ、ウトロ西 1 遺跡があり、ウトロ市街地方面ではウトロ遺跡やウトロ滝上遺跡、ペレケチャシなど縄文から続縄文文化、さらにはオホーツク文化、トビニタイ文化、擦文文化、アイヌ文化を包含している遺跡が見られる。

発掘調査区設定

調査区は四等三角点を基準点（原点）とし、この基準点と遺跡中央部にあたる任意の点（K-10）を結んだ線を A ラインとし、調査区域を確定させた（第 3 図）。調査区は東西方向をアルファベット順（h～a・A～M）、南北方向をアラビア数字順（1～20）とし、1 区画を 5m × 5m（25m²）に設定した。

発掘調査したトレンチ 4 は竪穴住居跡に被らず、転礫が地表面に顔を出し、下層に遺構を包含する可能性の高い区域に設定した。また、自然崩壊の危険に晒されている竪穴住居跡は計 4 軒であり、そのうち最も規模の大きい竪穴住居跡 1 棟を調査対象に選んだ。

層位

本年度の調査では、調査区内の堆積層は I～IV 層まで確認した。また、調査した竪穴住居跡内から Ma-b5（摩周岳 b5 降下軽石）と思われる細粒を確認したが、分析は行っていない。以下、基本層位と遺物文化層について解説する。

- I 層 表土の腐植土層を含む黒色土層。縄文中期から現代の遺物までを含む。
- II 層 基本の土色は黒褐色土層。中に焼土や炭化物、灰などの層を挟在する区域もある。主としてオホーツク文化期の遺構・遺物を包含する。
- III 層 黄灰～黄褐色土層。締まりのある層。主と

してオホーツク文化期と縄文中期の遺物を包含する。

IV層 黄灰ないし灰褐色土層。剣先スコップでも掘削が困難な締まりある土層。トレンチ4付近では、暗赤褐色～極暗赤褐色土を呈する。

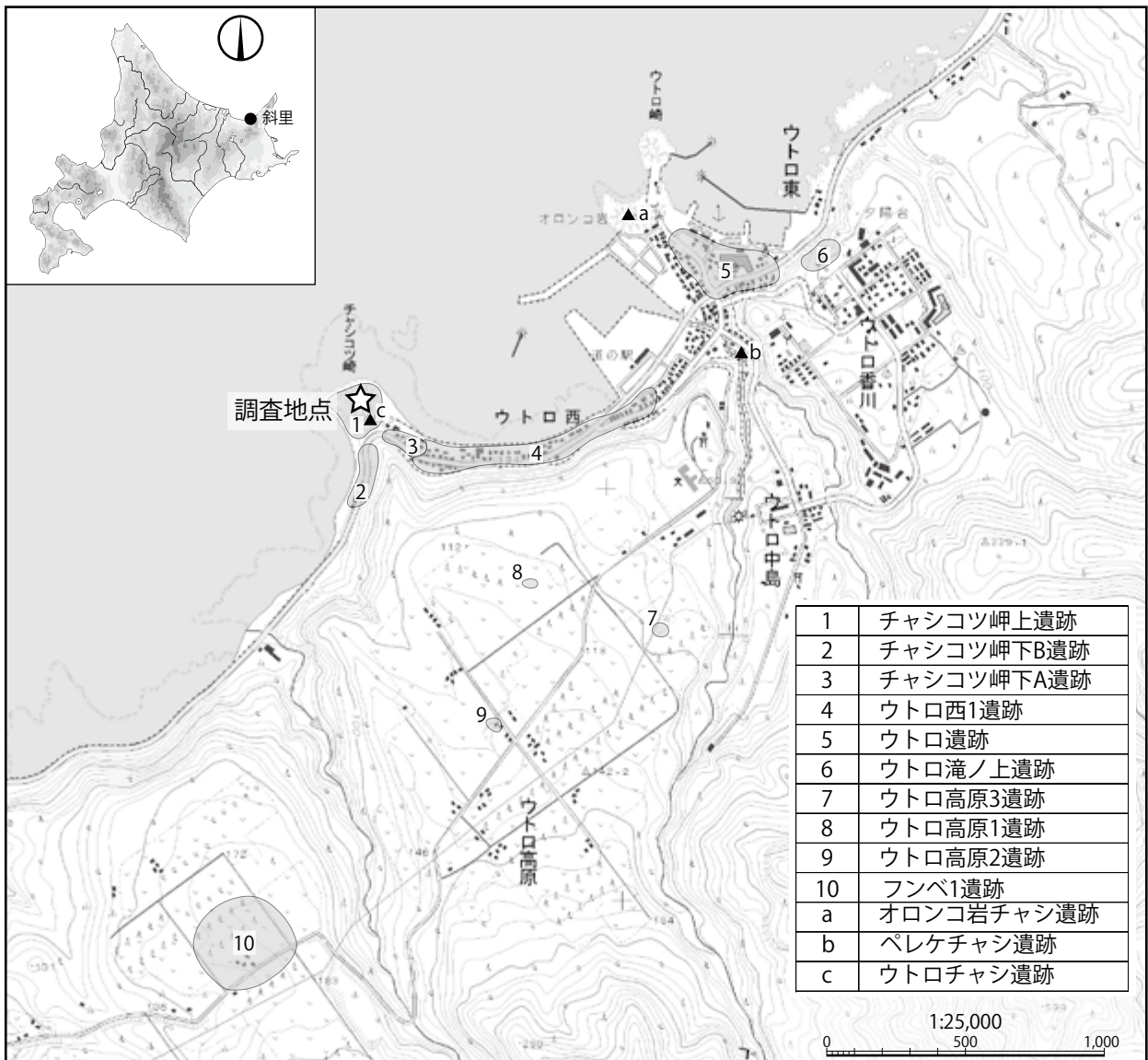
遺構の概略

トレンチ4からは、配石を伴う土坑墓1基と土坑1基及びその下層の土坑墓1基（いずれもオホーツク文化期）を検出した。一方、トレンチ5内の5号住居址は、オホーツク文化期の焼失住居であり、覆土中層からはトレンチ中央部から壁面を覆うように礫が敷き詰められた配石遺構が検出された。

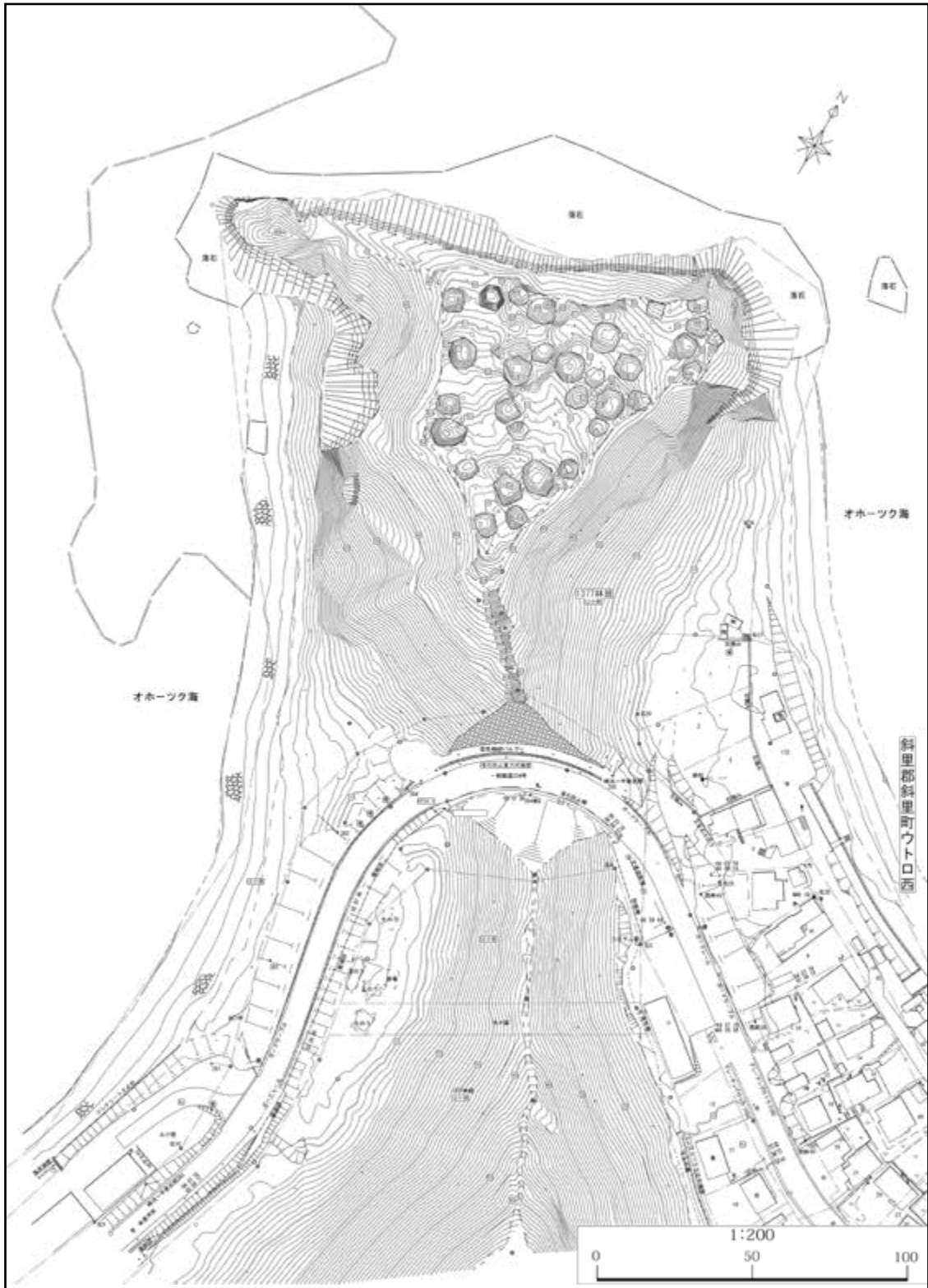
遺物の概略

出土遺物の内訳および件数は、土器933件、石器749件、レキ175件、鉄製品他496件の合計2,353件であった。しかしながら、これは件数であって、実際には現場で1点1点取り上げるのには時間がかかることから、まとめて取り上げたものも含んだ件数となっている。

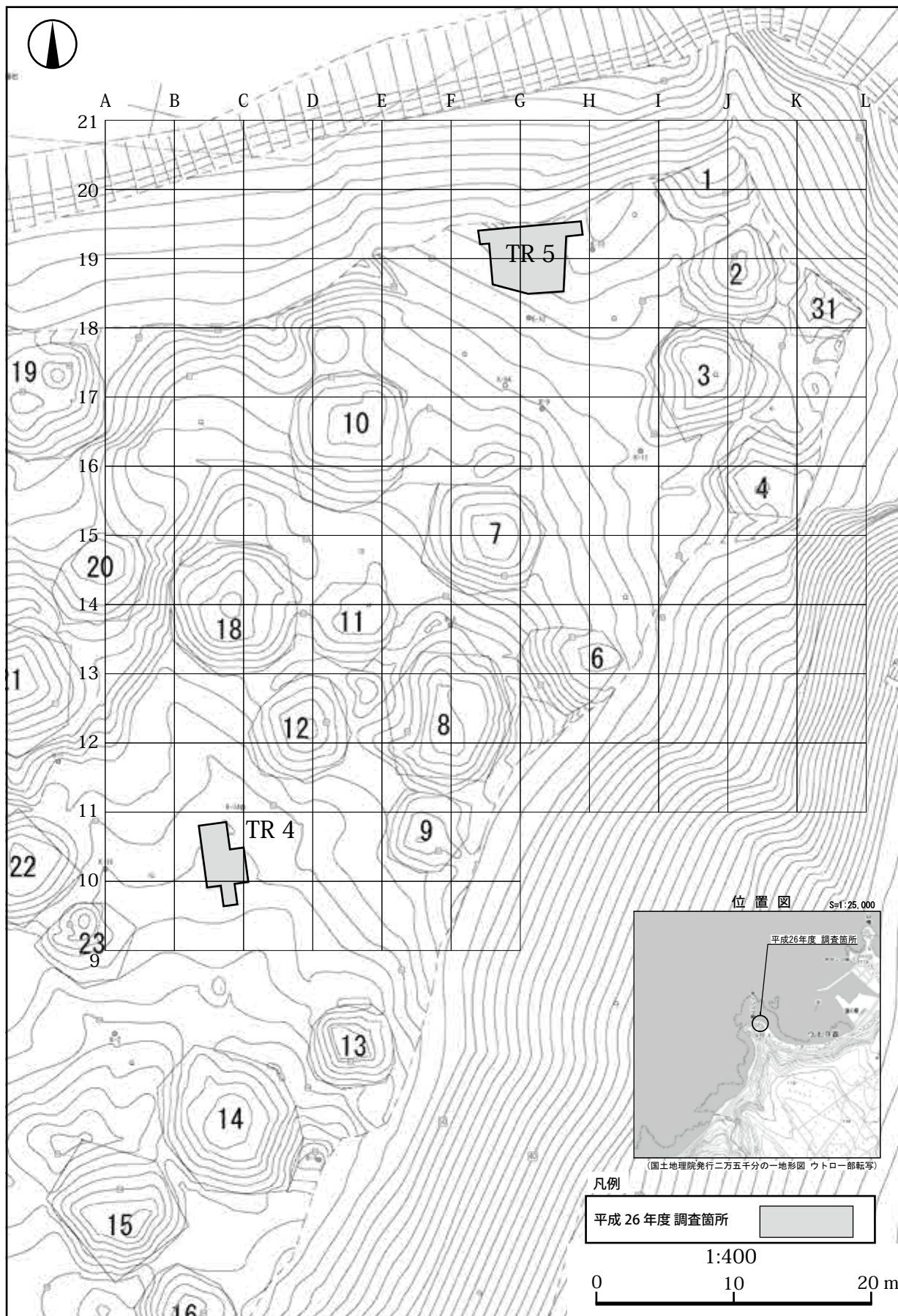
出土した遺物の時期を見ると、オホーツク文化期末の土器群が大多数を占めているが、僅かに、縄文中期のトコロ6類土器なども出土している。一方、石器ではすべての時期を通じ剥片石器が多く出土していた。使用石材は黒曜石が最も多く、安山岩や硬質頁岩、メノウ等も僅かに確認されている。（平河内 毅）



第1図 チャシコツ岬上遺跡 位置図



第2図 地形測量図



第3図 調査区及びグリッド位置図

第2章 各調査区の概要

トレンチ4

本トレンチはB-9・10、C-10区にまたがりトレンチを設定した。住居址(8・9・11・12・18・20~23)が複数立地する開けた場所に位置する。昨年に引き続き、墓域や祭儀跡等の遺構の存在を確認することを目的として掘削を実施した。

当初、B-9区からB-10区にかけて、1 m × 5 m のトレンチを設定し掘削を行っていたが、Ⅱ層を人力で掘削途中で検出した集石の全容を確認するために、調査区を一部拡張した。トレンチ東側の長軸部分にサブトレンチを設定し、Ⅳ層上面まで確認し、一部土層確認のために深掘りを行った。

また、時間的制約を受けていた為にサブトレンチを除く部分についてはⅢ b層途中まで掘削するに留まった。

(1) 層位

Ⅰ層：森林性の腐植土からなる黒褐色土層。オホーツク文化期の遺物を包含する。層厚6~12 cm。

Ⅱ層：黒~茶褐色土。オホーツク文化期の遺物を包含する。層厚は6~16 cm。

Ⅲ層：オホーツク文化期の遺物を包含する。

Ⅲ a層：黄褐色~黒褐色土で、層厚は4~12 cm。

Ⅲ b層：黄褐色土で木炭が散逸的に入る。層厚は20~41 cm。

Ⅳ層：本トレンチで確認されたⅣ層は昨年度の調査で確認された黄褐色ないし灰褐色のⅣ層とは異なり、Ⅳ a層とⅣ b層に分層される。

Ⅶ a層：暗赤褐色土~黄褐色土で構成され、層厚は28 cm。

Ⅶ b層：極暗赤褐色土と軽石で構成される。Ⅳ b層は上面まで確認するに留めた為、層厚は不明。

(2) 遺構の概要

PIT 1(土坑墓)

Ⅱ層を人力で掘削中に丸みを帯びたレキ集中を検出。微細図をとった後にレキを退けると、黒色土の広がり、土器の底部が露出していたので、サブトレンチをいれ調査を進めた。掘削を進めると土器が完形個体とわかり、遺構と判断した。

本遺構はオホーツク文化期の独特の葬法である、遺体の頭部に甕を被せたと思われる状態で検出された。規模は長軸1.25 m(南西方向)、短軸1.07 m(北東方向)、層厚58 cmを測る。本遺構は2段構造になっており平面形態は、上面が楕円形を呈し、下面が長方形を呈する。頭位は歯の出土位置とプランの長軸方向から南西ないし、南南西を向いていたと推測される。

覆土からの出土遺物は少量で主体は剥片石器で、製品は極端に少なく、目立った副葬品はオホーツク文化期の完形土器1個体のみである。また、人骨は完全に土壌化していたため検出されなかった。本遺構はオホーツク文化期末の配石を伴う土坑墓である。

PIT 2a(土坑)、PIT 2b(土坑墓)

Ⅱ層を人力で掘削中に被熱破碎したレキ集中を検出。微細図をとった後に石を退けると、黒色土の広がり確認された。それを半裁したところ、焼土をはさんでまた黒褐色土が広がり、そこから1段深くなっていることから2つの遺構があると判断した。以下順に説明する。

PIT 2aは、PIT 2bの上部を切って構築されている。規模は長軸2.18 m(北東方向)、短軸1.57 m(南西方向)、層厚を20 cm。平面形態は長楕円形を呈する。底面に焼土範囲が広がり、小規模ではあるが焼土を囲うように集石が確認された。本遺構は検出面と出土遺物より、オホーツク文化期末の遺構と推測される。

PIT 2bの規模は残存部より、長軸1.26 m(北方向)、短軸1 m(西方向)、層厚22 cmを測る。平面形態は上部が壊されているため不明確である。主体部のほとんどが壊されているため、土坑か土坑墓かの判断は難しいが、土坑墓が近くにあることや、PIT 1と同じ深さまで掘り込まれていることから土坑墓であると判断した。本遺構は出土遺物よりオホーツク文化期の土坑墓であると類推される。

(3) 遺物の概要

出土遺物の内約および件数は、土器が602件、石器が436件、レキ49件、骨139件、歯1件、鉄製品6件、その他の遺物が99件、合計1,332件が出土した。

土器のほとんどはオホーツク文化期の貼付文期の土器片である。数点ではあるが、オホーツク文化期の刻

文期と縄文中期・晩期の土器片が出土している。

石器はほとんどが剥片で、製品の出土は少量であった。骨は主に生骨で被熱はしていない。

(4) 小括

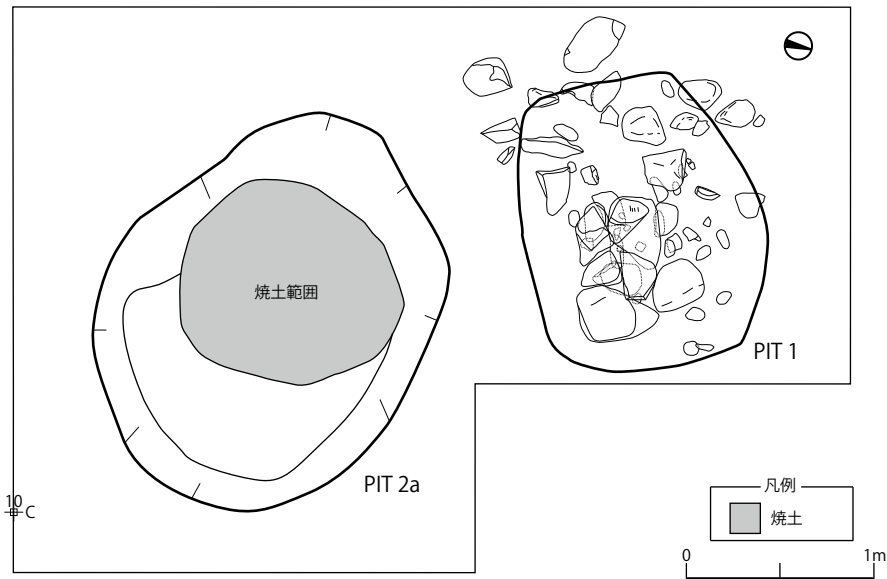
本トレンチの調査目的の1つであった、墓の有無を確認することができた。これより、岬の平坦地上には、住居址に限らず墓も構築されていることが明らかとなった。

PIT 1は土坑墓でありながら副葬品が少なく、罪人でも閉じ込めるかのように大小様々なレキで覆われている墓であった。

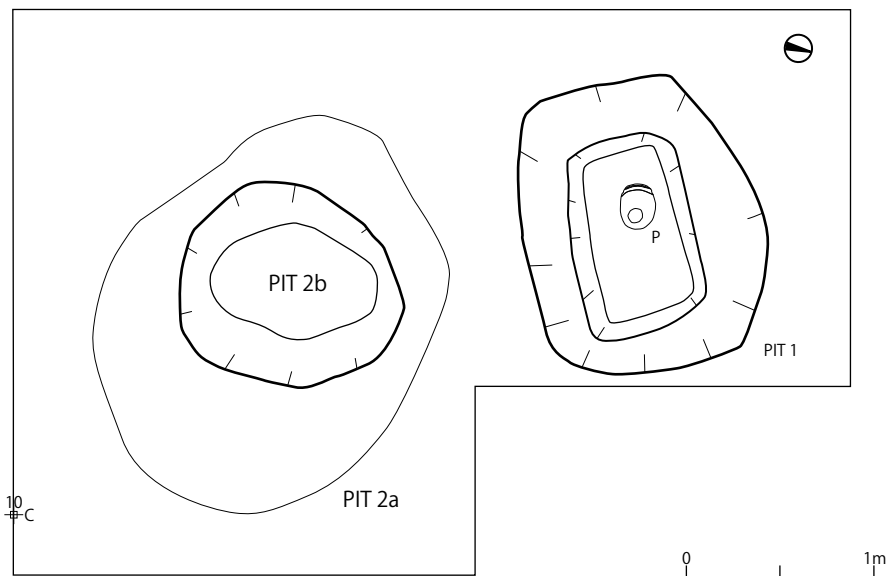
また、PIT 2aはPIT 2bを切って構築されている。おそらく、PIT 2aの構築者はそこに墓があると知らずに土坑を構築して、墓の上部を破壊してしまったと捉えられる。

よって、PIT 2aは本来別の使用目的があったが、意図せず墓を破壊してしまった為に土坑底面で検出されたような集石や焼土を用いた再葬的な儀礼に用いられたものと類推する。

(工藤 大)



第4図 PIT 1(土坑墓)及びPIT 2a(土坑)



第5図 PIT 1(土坑墓)及びPIT 2b(土坑墓)

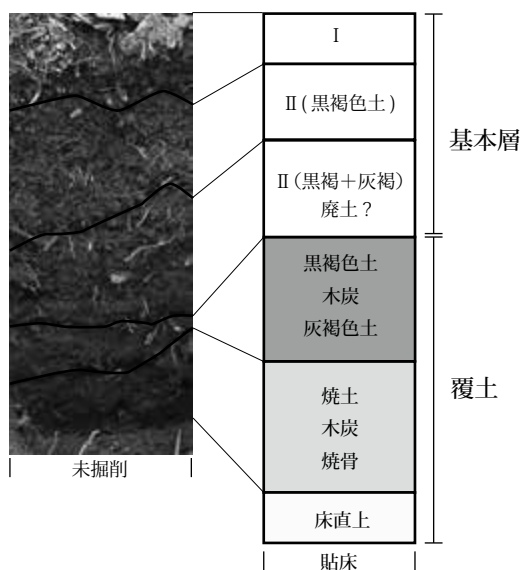
トレンチ5

チャシコツ崎の東端には5棟の竪穴住居跡がまつまって構築されており、それらから若干の距離を置いて5号住居址（大井1984）が構築されている。崩落により北側の一部分を失い、ほぼ方形のプランを呈するが、元々は五角形ないし六角形を成していたものと推察する。

竪穴の時期と層位確認のため中央部を試掘したところ、オホーツク土器（貼付文期）に加え、覆土中層よりトビニタイ土器片が出土した。本遺跡において、トビニタイ土器の出土はこれが初めてであり、オホーツク文化期末の集落の後の利用を探る上でも重要と判断し調査を開始した。また、トレンチ5は調査区のF-18・19、G-18・19に位置する。

(1) 層位

トレンチ5では住居址の南北と東西方向にベルトを残し、層位を確認しながら掘削を進めた。床面まで調査が進行していないため、ここでは現段階で確認出ている層位について柱状図を掲載するに留める。



第6図 トレンチ5層位図

(2) 遺構概要

5号住居址は壁際の礫集中に阻まれ掘り込み面を確認できていないが、覆土の上層でII層が確認されているためII層中の構築と推察する。

表土から30cmほど掘り下げた覆土中層からは、扁平な大礫を主体とした配石遺構が検出され、東側を除くほぼ全面に中央部から壁際まで礫が敷き詰められていた。竪穴廃絶後の構築であることからトビニタイ文化期の所産であると推察する。

また、遺構上層のII層中から厚さ約10cmもの焼土を検出し、焼土中には暗黄褐色の粘土が含まれていた。焼土中からは、石器や焼骨が多く出土している。

トレンチ北壁に幅10cm程度のサブトレンチを設定して掘削したところ、貼床と思われる硬化面が確認され、オホーツク文化期の竪穴住居跡であると判断した。

(3) 遺物概要

土器331件、石器313件、レキ126件、鉄製品5件、その他(骨製品、木炭、炭化種子等)246件の合計1,021件の遺物が出土した。土器は、貼付文系のオホーツク土器が主体であり、僅かではあるが縄文中期のトコロ6類の破片なども見つかった。石器は、黒曜石製の剥片石器が主体である。

特筆すべきは、配石遺構と同じレベルかそれよりも下層から出土した土器である(PL.2s上段左)。この土器には把手が付属しており、口縁部から胴部にかけて横走る貼付文は把手にまで及んでいる。形態は、底部から胴部下半にかけてやや直線的に膨らみ、ピークを迎えると内傾しながら頸部を形成し、口縁部は緩やかに外反する。器高は約19cmと、比較的小柄である。

検出時は、把手を下にして口を南東方向へ向けて横たえた状態であった。口縁部と底部の一部を意図的に打ち欠いている点ことから、何らかの儀礼址と推察する。

また、配石遺構に伴う大礫に寄り添うような状態で見つかった土器も特徴的な文様形態であった(PL.2上段右)。形態は、底部から胴部までほぼ直線的に膨らみ、頸部はやや挟れ気味に直立し、そのまま外反して口縁部を形成する。器高は、約9.5cmと小型である。

文様は、粘土紐による貼付文である。口縁部に平行して1条の直線状貼付文を巡らせ、頸部から胴部にかけて4~7条の粘土紐が左から右にせり上がるという、荒波を連想させる文様配置である。これらの土器の帰属時期については周辺の出土遺物等も含め、改めて検討したい。

(4) 小括

本トレンチは今年度の調査では完掘に至らず、覆土中の配石遺構を検出するに留めた。

成果としては、オホーツク文化期末の竪穴住居跡を利用したトビニタイ期と推察される配石遺構検出に加え、覆土中より多様な文様構成の土器群が出土したことである。

(平河内 毅)

引用文献

大井晴男 1984 「斜里町のオホーツク遺跡について」『知床博物館研究報告 第6集』17～66pp

参考文献

- 東京大学文学部 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』
斜里町教育委員会 1976 『ピラガ丘遺跡 - 第三地点発掘調査報告書 -』
利尻町教育委員会 1978 『亦稚貝塚 MATAWAKKA』
大井晴男 1982 「遺跡・遺跡群の形式論的处理について—オホーツク文化の場合」北海道考古学 第18輯
北海道目梨郡羅臼教育委員会 1991 『オタフク岩遺跡』
斜里町立知床博物館 1992 『郷土学習シリーズ第14集 ウトロの自然と歴史』
斜里町・斜里町教育委員会 2008 『しれところライブラリー9 知床の考古』
北海道網走市教育委員会 2009 『史跡最寄貝塚』
右代啓視 2010 「オホーツク文化の竪穴住居構造について」北海道開拓記念館研究紀要 第38号
斜里町立知床博物館 2011 『第33回特別展図録 発掘されたウトロ遺跡』
斜里町教育委員会 2011 『ウトロ遺跡』
斜里町教育委員会 2011 『チャシコツ岬下B遺跡発掘調査報告書』
東京大学大学院人文社会系研究科 2012 『トコロチャシ遺跡オホーツク地点』
斜里町教育委員会 2014 『チャシコツ岬上遺跡発掘調査報告書』



上空からみたチャシコツ崎とウトロ市街



遺跡遠景 SW→



遺跡遠景 NE→



チャシコツ岬上遺跡 出土土器



トレンチ4 調査前状況



トレンチ5 調査前状況



トレンチ4 骨斧出土状況 SW→



トレンチ5 刀子出土状況 E→



トレンチ4 PIT1集石検出状況 E→



トレンチ4 PIT1掘削状況 W→



トレンチ4 PIT1副葬品出土状況 NW→



トレンチ4 PIT1掘削状況 SW→



トレンチ4 PIT1調査風景



トレンチ4 PIT1 完掘 SW→



トレンチ4 PIT1 被り甕検出状況 NW→



トレンチ4 PIT1 歯出土状況 W→



トレンチ4 PIT1 調査風景



トレンチ4 PIT2a 検出状況 SW→



トレンチ4 PIT2a 完掘 NW→



トレンチ4 PIT2b 焼土検出状況 E→



トレンチ4 PIT2b 完掘状況 SW→



トレンチ4 PIT2a 土器出土状況 NE→



トレンチ4 完掘状況 S→



トレンチ4 海獣骨出土状況 S→



トレンチ4 調査風景①



トレンチ4 石鏃出土状況 W→



トレンチ4 調査風景②



トレンチ5 土器出土状況 SE→



トレンチ5 土器一括出土状況① E→



トレンチ5 土器一括出土状況② E→



トレンチ5 土器一括出土状況③ S→



トレンチ5 土器一括出土状況④ N→



トレンチ5 焼土・木炭a調査状況 S→



トレンチ5 焼土・木炭a土層断面 E→



トレンチ5 調査状況 SE→



トレンチ5 土器出土状況 NE→



トレンチ5 土器・炭化材出土状況 W→



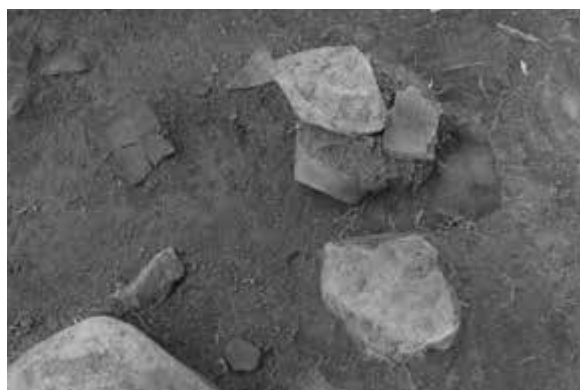
トレンチ5 焼骨出土状況 NW→



トレンチ5 石鏃出土状況 S→



トレンチ5 土器出土状況① S→



トレンチ5 土器出土状況② E→



トレンチ5 土器出土状況③ SE→



トレンチ5 作業風景



発掘風景 集合写真

チャシコツ岬上遺跡

発掘調査概要報告書

発行日：2015年3月

編集者：平河内 毅

発行所：斜里町教育委員会

北海道斜里郡斜里町本町12番地

印刷所：有限会社 斜里印刷

北海道斜里郡斜里町本町11番地2